



# 子ども樹木博士 ニュース

2025 - 9

No. 100

子ども樹木博士認定活動推進協議会

## 巻頭言



## 子ども樹木博士認定活動 25 周年 (子ども樹木博士ニュース 100 号)に寄せて



日本大学生物資源科学部 森林学科 杉浦 克明

子ども樹木博士認定活動 25 周年、ならびにニュース 100 号という節目にあたり、関係者の皆様のご支援に深く感謝申し上げます。

本活動は、1999 年にスタートして以来、全国各地で多くの皆さまのご支援とご協力のもと、継続的に実施され、これまでに数多くの“子ども樹木博士”が誕生してきました。25 年という長きにわたり、活動を途切れることなく続けてこられたのは、地域の自然を愛し、子どもたちの学びを支えてくださった指導者の皆さま、関係者の皆さま、そして熱心に取り組んでくれた子どもたちのおかげです。

近年、子どもたちが自然とふれあう機会は減少傾向にあります。だからこそ、木にふれ、葉のかたちや名前を知り、季節の移ろいを肌で感じる体験の大切さは、ますます重要になってきています。樹木の枝葉だけを見ても、「この葉っぱはなぜこんなかたちをしているのだろう?」、「なんで鋸歯(葉のギザギザ)があるものと全縁(葉のふちがなめらか)のものがあるのだろう?」、「落葉樹と常緑樹があるのはなぜなんだろう?」とその生態の違いがあるのがわかります。名前を知ることはもちろんのこと、観察力や洞察力を身に着けていくことにつながります。

森林環境教育には、森林で間伐や植林などを行う本

格的な体験ができるものもありますが、子ども樹木博士は、都市部にある公園や学校の敷地で実施することができます。つまり、都市型の森林環境教育モデルといえます。都市に住む子どもたちが、日常の中で自然への関心を育むための有効な手法といえるでしょう。また、地域に実際に存在する樹木を教材に使うことで、子どもたちが自分の暮らす土地に愛着を持つきっかけにもなります。

子ども樹木博士の実施方法については、全国森林レクリエーション協会のホームページに掲載されていますが、専門のスタッフがいないとできないと思っている方も多いのではないでしょうか。樹木の観察の際には、スタッフが教えるのではなく、参加者に樹木をしっかりと観察してもらい、肌で感じてもらったり、メモを取ったりイラストを描いたりして記録すれば十分だと思います。参加者に観察してほしい樹木の名前さえわかっているれば(調べれば)実施することは可能です。

本プログラムは、学校の教育課程との接続(学習指導要領との関連明記)もできるので、総合的な学習の時間、理科、生活科との連携についてホームページを用いた文書化も検討したいと思います。また、教員が自走できる体制を整備し、低学年向け、高学年向け、特別支援教育向けなど、対象に応じた実施方法や  
(2 ページにつづく)

### 【目次】

巻頭言	子ども樹木博士認定活動 25 周年 (子ども樹木博士ニュース 100 号) に寄せて	日本大学生物資源科学部森林学科 杉浦 克明… 1
100 号記念特集 I	子ども樹木博士の変遷	東京農工大学名誉教授 木平 勇吉… 2
100 号記念特集 II	「子ども樹木博士」が繋ぐ夢と未来 - 学びが紡いだ奇跡 -	日本大学名誉教授 井上 公基… 3
100 号記念特集 III	子ども樹木博士と森林教育	森林総合研究所多摩森林科学園 大石 康彦… 4
100 号記念特集 IV	子ども樹木博士認定活動推進協議会 25 周年に寄せて	一般社団法人日本森林インストラクター協会会長 寺嶋 嘉春… 5
100 号記念特集 V	子ども樹木博士発祥の地 東京農工大学を訪ねて	子ども樹木博士認定活動推進協議会事務局… 6
100 号記念特集 VI	子ども樹木博士ニュース 100 号特集号の発行にあたって	子ども樹木博士認定活動推進協議会事務局… 7
事務局だより		8



# 子ども樹木博士の変遷



東京農工大学名誉教授 木平 勇吉

## 1 発祥の聖地

この行事が最初に行われたところは写真1のような武蔵野の府中市にあり、いつも市民に開かれた静かなケヤキの森にある大学の構内である。今も国分寺街道に面している。

1999年頃の初秋の日曜日であった。付近の子供さんと父母兄200人ぐらいが賑やかに集まった。教える先生は二十歳ぐらいの若い大学生である。

## 2 出前授業の始まり

近くの小・中学校に呼び掛けて、出かけてこれを授業としてやらせてもらった。校庭や近くの公園で樹木の葉を取り名前をおぼえて学童は大はしゃぎ、担任の先生も喜んでくれた。教えた学生も楽しくお礼に学校給食をいただいた。繰り返しているうちに授業のやり方も上達して写真2のような雰囲気であった。

## 3 こども樹木博士の組織づくり

このプログラムに共感した人により組織づくりが始まり、官庁、個人、法人により全国的な「協議会」が出来て、テキストやニュースが作られて自主的な活動が始まった。全国でプログラムが広がり、特に森林レクリエーション協会が事務を担当した。

## 4 最盛期

このころ神奈川県から県内の企業がもつ面白い技術の子供たちに紹介する事業が提案されて、例えば「小田原のかまぼこ」づくりなど、樹木博士も参加して小・中・高校も加わり最盛期を迎えた。樹木の名前を覚える専用コースが北海道の国有林にできたり、実施団体も子供の参加者の数は増え順調な時代がはじまった。

## 5 運動の停滞

しかし、プログラムの実施機会が減り、したがって子供の参加者が減りだした。時代は忙しくなり総合学習への関心は薄れ、樹木の名前に興味を持つロマンチストは減ってしまったのか、制度としての弱さもあった。成果が見える動機付けが必要かなとも感じている。

## 6 これからの子ども樹木博士。

しかし、身近では、初夏は水色のアジサイの花、初秋はキンモクセイ、冬はサザンカ、早春はチンチョウゲの香りが私たちの暮しを楽しませてくれている。樹木の名前を知ることによってそのような楽しい時間を子供たちが少しでも感じる事が私のささやかな希望だ。

「ニュース 100号記念号」に際してこれまでの関係者のご努力に感謝し、さらなる応援をお願いしたい。



写真1 東京農工大学正門とケヤキ並木



写真2 出前授業

\*\*\*\*\*

(1ページから)

フォーマットを整備していくことも求められます。さらに、子ども樹木博士を応用して、「見て答える」だけでなく、「調べたこと」をポスターやスライドにまとめて発表するなどの活動に発展させれば、主体的な学びの促進にもつながります。これは探究の時間の題材としての活用も期待できます。

子ども樹木博士を応用して地域固有の自然や文化と結びつけたプログラムへ展開していくことで、より深い学びや持続的な活動へと発展できる可能性があります。子ども樹木博士をきっかけに、森林での様々な学

びや自然体験につなげ、非認知能力（知識や技能などとは異なり、目に見えにくい“生きる力”とも言える力）を高めてほしいと思います。

未来を担う子どもたちが、自然とともに生きる感性を育てていくために、私たち大人の役割もまた大きく問われています。25周年を一つの節目としながら、これからの10年、20年に向けて、より多くの子供たちにこの体験が届くよう、私たちも新たな歩みを進めてまいります。今後とも、引き続きご支援とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



## 「子ども樹木博士」が繋ぐ夢と未来 —学びが紡いだ奇跡—



日本大学名誉教授 井上 公基

「子ども樹木博士認定活動推進協議会」が発足した平成12年に合わせたように学習指導要領改訂により「総合的な学習の時間」が導入されました。私たちは藤沢市を中心に神奈川県内の小学校校庭や地域の公園を活用し「子ども樹木博士」の活動を展開してきました。このプログラムは、1学年あたり3クラス程度の児童を対象とし、限られた時間で効率的に環境教育を行うことが求められます。しかし、屋外で100名規模の活動を進めるには私一人では難しい場面もありました。

そこで、森林資源科学科の学生たちの協力を得ることにしました。環境教育への高い関心を持つ多くの学生が、この活動のサポート役として積極的に参加し、地域の小学校へ同行してくれました。彼らは子どもたちに樹木について楽しく、真剣に学びの場を提供し、活動の成功に大きく貢献しました。学生たちの熱意と協力のおかげで、「子ども樹木博士」の活動は多くの子どもたちに環境への興味を芽生えさせる素晴らしい機会となりました。

その「子ども樹木博士」の活動の場には、樹木について学びたいという純粋な好奇心を抱く子どもたちと、その学びを熱心にサポートする大学生たちが集まりました。緑豊かな校庭での活動は、子どもたちの笑顔と真剣なまなざしに包まれ、共に成長していく学びの瞬間を生み出していました。

その中で、ひときわ目を輝かせながら大学生たちの姿に憧れる小学生がいました。「僕も大人になったら、大学生になって樹木博士をお手伝いしたい！」その言葉には、未来への希望と憧れがあふれていました。そんな彼の思いは、まさに学びの場が持つ力を象徴するものでした。

時が流れ、奇跡のような瞬間が訪れました。当時小学4年生が8年後に、私たちの大学に入学していたのです。それも、子ども樹木博士を担当している大学の

学部・学科に入学してくれました。かつて憧れたその場に立ち、大学生として熱心に後輩たちの活動をサポートしてくれる姿は感動そのものでした。小さな出会いが未来の環境教育リーダーを生むきっかけとなり、その学びが循環していく瞬間は、奇跡に近いものがありました。

彼が活動を通じて憧れた「真剣に向き合う大学生たちの姿」は、学びと成長の象徴です。子どもたちが知識を得るだけでなく、未来に夢を描く力を育むことができる「子ども樹木博士」の活動。私たちが取り組んできたこのプロジェクトが、ただ教育を提供するだけではなく、次世代の可能性を広げる場であることを改めて実感しました。

活動を通じて得られたこの奇跡的なエピソードは、多くの人々に希望を与え、環境教育の価値を深く伝えるものです。「やっていたよかった」と心から思える瞬間が、こうして形となり、世代を超えて繋がっていくのです。

これからも、「子ども樹木博士」が地域社会や未来へ広がり、多くの子どもたちの夢を育む場となることを願っています。そして、その活動がさらなる感動的な物語を生み続けるよう、期待しています。



子どもたちを引率する研究室学生



## 子ども樹木博士と森林教育



森林総合研究所多摩森林科学園 大石 康彦

子ども樹木博士創始者の木平先生は、樹木博士の理念について、山林 No1651 (2021) で「フィールドの散策と樹木に手で触れることで自然を楽しむ」ことと述べています。また、本会の杉浦会長は、樹木博士のねらいについて、ニュース No97 (2024) で「樹木の名前を覚えることだけではなく、樹木に関心を寄せ、実際に樹木に触れ、感じることにあるはず」と述べています。本稿では、お二人の言葉を樹木博士の根幹として捉え、森林教育の視点から樹木博士の可能性を展望してみたいと思います。

ところで、森林の多面的な機能の評価に関する日本学術会議答申 (2001) は、森林の多面的な機能として、(1) 生物多様性保全、(2) 地球環境保全、(3) 土砂災害防止/土壌保全、(4) 水源涵養、(5) 快適環境形成、(6) 保健・レクリエーション、(7) 文化、(8) 物質生産の8機能をあげています。森林教育では、これら森林の多面的機能の全てを扱います。樹木博士は自然を楽しんだり感じたりすることを目指しますので、保健・レクリエーション機能にかかわる活動の一つとして森林教育の一翼を担っているといえます。

さて、樹木博士では、識別試験による級・段の認定が直接的な目標となっています。そこで、参加者も指導者も、樹木の識別に必要な葉の形やつき方などの樹木の特徴に注目することになります。このため、樹木の特徴以外は視野に入りにくくなっていないでしょうか。しかし、樹木博士が誘う樹木との出会いは、多くの参加者にとって生涯に稀な機会だと思われれます。その貴重な機会が、樹木に触れて楽しんだり感じたりする、樹木の特徴を覚え識別能力と成績を持ち帰って終わるのはもったいないと思うのです。

なぜならば、樹木博士は樹木や森林の理解へ、さらには森林の多面的機能の理解への糸口になると考える

からです。いや、樹木博士が樹木や森林、森林の多面的機能の理解につながることは想定しているし、そういった展開の基礎になるのだからよいのではという声もあると思います。ですが、だからこそ樹木博士をもう一步前に進めることができないかという話です。

樹木博士の指導者は、コースを下見する際に葉の形や付き方などの特徴から、課題とする樹木を選定していると思います。そうして選ばれた樹木が、樹木ツアー>標本確認>識別試験のなかで、それぞれの特徴を問う課題として提示されるわけです。ここで考えたいのは、選定された樹木は、形態上の特徴の面から捉えられるだけでなく、形態以外の様々な面からも捉えることができるということです。森林が多面的機能を有するという事は、森林を構成する個々の樹木も様々な機能の担い手ということです。したがって、樹木博士で課題とする樹木を、形態上の特徴からだけでなく、森林の多面的機能に照らして捉えることもできるはずです。

例えば、コナラを選んだ場合を考えてみましょう。コナラは雑木林の主要構成樹種として、様々な動植物を育み(生物多様性)、近隣住民に住環境(快適環境保全)や散策などの場を提供し(保健・レクリエーション)、シイタケ栽培の原木を生産(物質生産)します。また、かつては薪や木炭の材料を生産(物質生産)していました。薪炭林は地域の文化や歴史の物語(文化)でもあります。樹木博士では、形態上の特徴だけでなく様々な機能も捉えないもったいないと思います。

最後に、樹木博士で参加者個人が出会うのは、その場所に生きる唯一無二の木であることを強調しておきたいと思います。木平先生は山林 No1651 (2021) で、樹木博士にリモート技術の活用が考えられるが乗り気になれないと述べています。私も同感です。



# 子ども樹木博士認定活動推進協議会 25周年に寄せて



一般社団法人日本森林インストラクター協会 会長 寺嶋 嘉春

子ども樹木博士認定活動推進協議会が25周年を迎えられるとのこと、お祝い申し上げますとともに、事務局を担当されている一般社団法人全国森林レクリエーションをはじめ、長きにわたり認定活動に携われ支えてこられた諸団体、様々な工夫をされ活動を継続している全国各地の団体や指導者の方々に心から敬意を表する次第です。

この制度が発足したのは、西暦2000年ということになります。当時の森林を巡る情勢を振り返ることにより、改めてこの活動の意義を考えてみたいと思います。

## ▶ 2000（平成12）年当時の森林を巡る情勢

1986（昭和61）年3月の大雪により、東京都の西部、多摩地域を中心に、スギ・ヒノキの人工林において、大規模な雪害が発生しました。これを契機に、後に「森林ボランティア」と呼ばれる、市民活動が都市近郊を中心に始まりました。

この活動の対象となった森林は、当時、都市近郊林と呼ばれていましたが、活動の目的や活動の対象となった森林を構成する樹種によって、2つの形態に分けることができると考えられます。

1つは林業が営まれる地域において主に人工林の整備に市民が参加する活動で、もう1つは、当時雑木林と呼ばれた、薪炭林や農用林が放置され荒廃が進んでいた地域の里山保全活動です。

20世紀末に始まった、市民による「人工林整備活動」と農地に付随する里山林での「里山保全活動」は、共に森林ボランティア活動として、2000年当時、広く全国各地に展開していきました。

## ▶ 新しい自然保護活動としての里山保全

1970年代の高度成長期における自然保護運動では、特に、人為の影響を排除した人手の入らない原生林などを保護する必要が強調され、木を伐ることは一律に否定し、森林は自然の遷移に任せることがよいと理解される傾向がありました。

一方、1992年にブラジルのリオデジャネイロで開催された地球環境サミットを契機として、生物多様性の保全の必要性について認識が徐々に深まるとともに、薪炭林・農用林として管理され、人びとの暮らし

を支えてきた里山の生態系の豊かさが評価されるようになりました。

実際、2001年の環境省の調査によると、絶滅危惧種が生息する地域の多くは、原生的な自然地域よりもむしろ雑木林のような里山地域であることが明らかにされています。

ここに、主として都市近郊の減少していく雑木林などを対象とした新しい自然保護活動としての里山保全活動が始まりました。

## ▶ 多様な樹種を対象とする里山保全

木材価格の低迷と林業労働力の減少が続く中で、間伐が行われず荒廃が進む人工林を対象に、一般市民がその保全・再生に関わるという、森林ボランティア活動においては、林業のプロや地権者が説明する樹種名は、多くの場合、スギ・ヒノキ・マツ・ザツの4種で用が足りてしまうといわれたことがありました。

しかし、里山保全の意味を理解した市民は、ザツと一括されてきた多様な樹種には、それぞれが役割と価値があることを知り、また、有史以前から日本列島で育まれた日本人の歴史や文化と密接に関わっていることについても理解を深めていきました。

## ▶ 子ども樹木博士認定活動推進の意義

高度成長期、スギ・ヒノキ・マツ・ザツと呼ばれた一時期が過ぎ、21世紀を迎えて、改めて、多様な樹木の1本1本に目を向け、その役割や価値、楽しさ、美しさ、そして不思議さについて、友だち同士や親子で話題とするきっかけづくりをする活動として、「子ども樹木博士認定活動」の取組みが続けられていると言えるのではないかと思います。

\*\*\*

今後、子ども樹木博士認定活動が、身近な公園をはじめ、里山保全活動フィールド、学校の校庭の樹木や近隣の雑木林において、地域の自然環境や暮らしの変遷、歴史や文化を学び体験する学習林として活用して行われ、持続可能な社会構築のきっかけとなることが、子ども樹木博士認定活動の意義であることに思いを致し、多くの方々のご理解、ご支援をお願いする次第です。



## 子ども樹木博士発祥の地 東京農工大学を訪ねて

子ども樹木博士認定活動推進協議会事務局

令和7年7月12日(土)、東京農工大学府中キャンパスにおいて開催された公開講座「子ども樹木博士」を訪ねてきました。皆様ご承知のとおり、子ども樹木博士認定活動のプログラムは、平成11(1999)年10月に、当時、東京農工大学演習林長であられた木平勇吉教授らによって始められたものです。以来、木平教授の退官後は、亀山章教授(現東京農工大学名誉教授)、そして現在の戸田浩人教授へと引き継がれ、毎年実施(新型コロナウイルス感染症のため、変則的に実施した年を含む。)され、今日に至っています。

東京農工大学府中キャンパスは、東京都府中市に約15haの広大な敷地を擁し、講義棟や研究棟の校舎群のほか、農場には畑や温室、乳牛の飼育施設など農学部のキャンパスにふさわしい施設も配置されています。正門から本館に通じるケヤキ並木と本館の時計台は「府中30景」にも選定され、府中市を代表する景観のひとつになっています。ケヤキ並木に代表されるようにキャンパス全体が緑化されており、緑のキャンパスとして都市における貴重な緑地にもなっています。子ども樹木博士は、この緑地を活用して実施されています。

令和7年度の子ども樹木博士は、募集人数40人として、5月7日に募集が開始され、5月21日には80名を超える参加希望に達し、募集が締め切られました。各地で実施される子ども樹木博士が参加者不足で悩まされているのとは対照的に、東京農工大学の子ども樹木博士は、毎年大変人気があるようです。

参加者には、事前に樹木名リストが配布され、予習が可能なように樹名の名札が吊るされた標本木がキャンパス内に準備されていました。

当日は、午前の部と午後の部にわかれ実施されまし

た。受付を終えると、親子ごと、グループごとにインストラクター役の学生と一緒にキャンパス内を巡り、学生からそれぞれの樹木の説明を受ける樹木ツアーが行われました。インストラクター役の学生は、大学1年生から大学院の森林関係を学ぶ学生に加え、森づくりのサークルに所属する学生が担当しました。

約1時間かけて、生育している樹木を見ながらの学習を終えると、次は、テストに備え、模擬練習が行われました。教室の机にリスト番号順に並べられた枝葉標本を見ながら、名前の確認作業を行います。初級編で25種、中級編では初級編を含め全部で54種について復習します。

模擬練習を終えると本番のテストとなります。テストは、別教室に初級編の25種と中級編の29種がそれぞれランダムに番号がつけられて机の上に並んでいる枝葉の標本の名前を解答用紙に記入していきます。最後に戸田浩人教授から受講した級の認定証が授与されプログラムが終了しました。

東京農工大学のプログラムは元祖であることから樹種数が多く大変難度が高いのが特徴となっています。今年度は中級編までとし54種の実施でしたが、以前は上級編として100種を超える樹種数で実施したこともあったそうです。それでも何年か参加し続け、完全に全種正解したつわものもいたそうです。

緑豊かなキャンパスとインストラクターとして活躍できる学生がいる恵まれた環境の下で実施される東京農工大学の子ども樹木博士、担当する皆様は毎年苦勞も多いことと思いますが、今後も大学らしく、知識欲の高い子どもたちを対象に、本格的な学習要素の強い子ども樹木博士を続けていただきたいと思います。





# 子ども樹木博士ニュース

## 100号特集号の発行にあたって

### 子ども樹木博士認定活動推進協議会事務局

子ども樹木博士認定活動推進協議会は、今年で発足25周年の節目を迎えました。毎年四半期ごとに発行している機関誌「子ども樹木博士ニュース」は、令和7年9月に発行される今号がちょうど100号となります。これを機会に特集号として、杉浦克明会長、木平勇吉初代会長、井上公基第2代会長にご寄稿いただくとともに、森林環境教育の研究者を代表して森林総合研究所多摩森林科学園の大石康彦氏、子ども樹木博士認定活動の実施に全国各地でご尽力をいただいている一般社団法人日本森林インストラクター協会を代表して寺嶋嘉春会長にもご寄稿いただきました。ご多用中のところ、快くご寄稿をお引き受けいただき、改めて御礼申し上げます。また、子ども樹木博士発祥の地、東京農工大学府中キャンパスで行われた今年の子ども樹木博士の様子も紹介させていただきます。

さて、子ども樹木博士は、東京農工大学演習林長であられた木平勇吉教授（当時）らによって考案され、平成11（1999）年10月に府中キャンパスにおいて実施されたのが始まりです。2日間の開催で100名の募集に対し、272名の親子の参加があり、この試みは地域の大きな反響を呼ぶこととなりました。これをきっかけとし、箕輪光博東京大学教授・日本林学会会長（当時）を発起人代表とする森林・林業関係機関有志による検討を経て、平成12（2000）年6月12日に設立総会が開催され、子ども樹木博士認定活動推進協議会が発足しました。一般社団法人全国森林レクリエーション協会は、協議会発足以来、継続して事務局を担当させていただいています。

本協議会では、発足当初から子ども樹木博士の実施機関の募集とネットワークの形成を目的とし、実施団体の把握と全国での子ども樹木博士の実施結果のとりまとめを行ってきました。把握方法は、基本的には子ども樹木博士を実施した団体から協議会への報告となりますが、可能な限り事務局としてインターネット等を通じて独自把握も行っています。しかしながら、近

年、特にコロナ禍もあり、残念ながら実施報告数が低調に推移しています。実施報告の願いが十分に周知されていないこともその一因かもしれませんが、木平初代会長がご指摘のとおり停滞期を迎えていることが大きな原因と考えられます。

子ども樹木博士のプログラムは、樹木の名前や特徴を覚えるためには、合理的に組み立てられたプログラムではありますが、これまでも多くの皆様からのご指摘のとおり、変化に乏しい一面もあります。実施するインストラクターからしても面白みに欠け、毎年実施することに熱意が薄れてきてしまうとも言われています。杉浦会長がご指摘のとおり、学校の教育課程との接続や主体的な学びへと発展できるプログラムなど、新たなプログラム開発や改良が必要な時期を迎えているとも言えます。

子ども樹木博士は、子どもたちをはじめとして多くの人たちに、樹木の名前や特徴などを知ることを通じて森林に親しんでもらうことを目的とした森林環境教育プログラムです。名前を覚えるということは、人間関係においてもお互いに接点を持つ第一歩の行為であるように、樹木との接点を持つ第一歩として樹木の名前を覚えることは意義深いことと考えられます。

東京農工大学のプログラムのように、多くの樹種の名前や特徴を覚える基本的なプログラムから、ワークシートを活用した認定活動（子ども樹木博士ニュースNo.88事例報告参照）や参加者が自ら樹木を観察して発表するなど、新たなプログラムまで、多様な形で様々な工夫を重ねながら、今後も各地で子ども樹木博士が継続的に実施されることが望まれます。

子ども樹木博士認定活動協議会では、各実施団体の活動をサポートするとともに、各種情報の収集と発信を通じ、今後も子ども樹木博士の推進に努めていきたいと思っておりますので、引き続きあたたかいご支援をお願いいたします。

## ● ● 事務局だより ● ●

### ◆令和6年度子ども樹木博士認定活動の実施状況

実施日	実施団体等	都道府県	募集人数	参加人数	摘要
1 6. 5.19	丹波篠山市役所農都創造部森づくり課	兵庫県	20	8	せんじゅの森（丹波篠山市今田町）
2 6. 6. 2	西東京市「子ども樹木博士」を育てる会	東京都	40	33	東京大学田無演習林
3 6. 7.13	東京農工大学農学部	東京都	40	62	東京農工大学府中キャンパス
4 6. 7.15	(公財)山梨県緑化推進機構	山梨県	14	14	武田の杜
5 6. 8. 4	福島民友新聞社・福島森林管理署	福島県	50	18	南澤国有林（福島市）
6 6. 8. 7	子ども樹木博士認定活動推進協議会	東京都	178	178	農林水産省（こども霞が関見学デー）
7 6. 8. 7	本の森図書館・グリーンピースパーク	高知県	10	8	本の森図書館・越知町立越智小学校
8 6. 8. 8	子ども樹木博士活動推進協議会	東京都	207	207	農林水産省（こども霞が関見学デー）
9 6. 8. 8	真庭森林組合	岡山県	15	15	勝山美しい森遊歩道（真庭市菅谷地）
10 6. 8.10	(公財)山梨県緑化推進機構	山梨県	10	10	河口湖フィールドセンター
11 6. 8.11	森林インストラクターしずおか	静岡県	20	9	静岡県立美術館の森
12 6.10.26	(公財)山梨県緑化推進機構	兵庫県	20	10	武田の杜
13 6.11.10	西東京市「子ども樹木博士」を育てる会	東京都	40	45	東京大学田無演習林
14 6.11.14	たかつき環境市民会議 里山グループ	大阪府	38	38	高槻市上の池公園
			702	655	

(注) 1. 実施団体から事務局に報告のあったもの及び事務局が独自に把握したものである。

2. 報告等が参加者人数のみの場合は募集人数も同数として整理、募集人数のみの場合は参加人数も同数として整理している。

### ◆子ども樹木博士認定活動推進協議会新規会員募集

子ども樹木博士認定活動推進協議会では、新規会員を募集しています。

子ども樹木博士認定活動推進協議会は、「子ども樹木博士」の目的をPRし、情報提供などを通じて、その活動を全国的に推進する組織として、①機関誌「子ども樹木博士ニュース」の発行・配布、②子ども樹木博士教材「樹木ガイド」の提供、③子ども樹木博士認定証（用紙）の提供、④インストラクターの紹介、⑤子ども樹木博士のPRパンフレットの作成・配布、⑥全国の子ども樹木博士の活動状況の取りまとめ及びネットワーク化、⑦子ども樹木博士の実施方法の手引書の作成・配布等の活動に取り組んでいます。

子ども樹木博士認定活動の趣旨に賛同し、子ども樹木博士を実施してみたい、関心がある、またはこれらの活動を支援して下さる団体や個人の皆様の入会をお願いいたします。年会費は、団体会員 10,000 円、個人会員 2,000 円となります。

○入会申込・問合せ先：〒112-0004 東京都文京区後楽 1-7-12 林友ビル

一般社団法人全国森林レクリエーション協会内 子ども樹木博士認定活動協議会

TEL 03-5840-7471 FAX 03-5840-7472 kodomohakase@shinrinreku.jp

### ◆実施結果のご報告のお願い

子ども樹木博士認定活動（親子や大人を対象としたものも含みます。）を実施しましたら、当協議会会員、非会員を問わず、実施結果のご報告をお願いします。

報告用紙は、右記のURLのホームページからWordの用紙をダウンロードできます。報告用紙がない場合は、①実施団体名、②実施年月日、③募集人数、④参加人数、⑤対象者（小学生、親子など）、⑥実施場所を記載したメモを右記のFAX又はメールで子ども樹木博士認定活動推進協議会までお送りください。お手数をおかけしますがよろしくお願いいたします。

## 子ども樹木博士ニュース

2025年9月1日 No.100

子ども樹木博士認定活動推進協議会

〒112-0004 東京都文京区後楽 1-7-12 林友ビル 6階

一般社団法人全国森林レクリエーション協会内

TEL: 03-5840-7471 FAX: 03-5840-7472

E-mail: kodomohakase@shinrinreku.jp

URL: <http://www.shinrinreku.jp/kyokai/kodomokyou.html>  
<http://www.shinrinreku.jp/kodomo-n/main.html>